

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 626 号] 2014 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: [office@bachchor-tokyo.jp](mailto:office@bachchor-tokyo.jp) <http://bachchor-tokyo.jp/>

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 626

August 2014

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## — 創立 52 周年の想い —

### 勝ち負けのない人生

大村 恵美子 (主宰者)

去る 7 月 5 日の合唱団創立記念懇親会は、団内の十数名の小さなグループながら、一人びとりの、ごく内面的な心情にいたるまで、親しく話しあうことができ、とても印象に残る一日となりました。

7 月に入ってから、世界中の空気は、まるで戦国時代の弱肉強食状況に突入したかのように、子どもの殺し合いから、国土の境界を無視した暴力の応酬が激化しています (パレスティナ/イスラエルなど)。同じ果たし合いでも、サッカーの世界杯がくり展げられ、国旗・国歌の氾濫も日々テレビに現れます。しかしここでは、選手たちが日頃、異国のチームで入りまじり仲間となって活躍しており、競う場面でも、終れば互いに健闘をねぎらい合う、ほほえましいシーンにも事欠かないでいられます。

こんな騒然たる社会のさなか、7 月 10 日の夜に、私は或るくつきりとした夢を見ました。それは、私の人生の理想を 1 曲の歌に託すならば、どれになるのだろうか、というテーマでした。クリスチャンのつき合いでは、お互いを識り合うよすがにと、最愛の讃美歌は？と尋ねられることがあります。そんな時私は、カトリック、プロテスタント、その他宗派にこだわらず、という配慮もあって、長い間「イエス君は いとうるわし」(「讃美歌」#166、「讃美歌 21」#482) という 17 世紀頃のシュレジエン民謡をあげていました。神の子イエスの美しさを、花、雪、月、風、光、冠にたとえた素直な歌です。

ところが、この 10 日の夜の夢では、私が今までいちども思いついたことのない、アッシジのフランチェスコ (1182-1226) の太陽讃歌 Laudato si', mi Signore (あなたを讃えます、わが主よ) のコピーが持ち出されて、進路を決めかねている若い学生、新しい任地で働き出した若い牧師、ひいてはわが合唱団の親しい仲間など、そこに登場してくる何人かの、深い問答を要求している友人らに、私がかまってその歌を紹介するのです。ちらと見たところ、楽譜は白っぽく、ほとんど歌詞の字や音符の形など、判別、確認できるものではなかったのですが——。そして、これも今までほとんど思い出したことのない、留学時代の教室での一場面ま

でが浮かび上がりました。私のコンセルヴァトワール [ストラズブール] のすぐれた老恩師から、「あなたも経験だと思って、作曲の学生コンクールに何か提出してみては？」と誘われ、自信皆無ながら、思いついた内容が、このフランチェスコの太陽讃歌だったこと。しかし、短い留学生活の終りを、できるだけ多くのヨーロッパ見物旅行にあてることになって、早々にその努力は頓挫してしまいましたが、じっさい私自身も、当時突如として湧いた着想ではありました。

内容としては、聖書の「詩編」148:1-6 と、私が歌い馴れていた「讃美歌」(1954 年) の日本語訳とを、ここに記してみます。

#### ◇ 「詩編」148:1-6 (新共同訳)

ハレルヤ

天において、主を賛美せよ

高い天で、主を賛美せよ

御使いらよ、こぞって、主を賛美せよ

主の万軍よ、こぞって、主を賛美せよ

日よ、月よ、主を賛美せよ

公開集中練習/ワークショップ

### バッハのモテットを日本語で歌う

指導：大村恵美子

8 月 / 9 日、23 日、30 日 (土曜日、3 回)

午後 3 時 30 分 ~ 5 時 30 分

会場：荻窪教会 参加費：無料

●夏休みの午後、バッハモテットの最高傑作「イエス、わが喜び」(Jesu, meine Freude BWV 227、5 声部 SI/SII/A/T/B) を、日本語で歌ってみるワークショップ。●各声部の音取りから始めますので、初めての方でもご参加いただけます。●3 回をかけて練習し、最終日には、終了後に受講者全員によるミニコンサート (午後 5 時 30 分~6 時)。

◆申込み：東京バッハ合唱団事務局 (上掲月報タイトル内)  
(お名前・声部・住所・連絡先 Tel/Mail を明記)

◆参加費：無料  
(ただし、事前にお申込をお願いします)

◆楽譜代：実費 500 円  
(訳詞付きコピー楽譜、当日販売。  
(事前に入手ご希望の方は、事務局までお申し出ください。送料とも 580 円))

輝く星よ、主を賛美せよ  
天の天よ  
天の上にある水よ、主を賛美せよ  
主の御名を賛美せよ  
主は命じられ、すべてのものは創造された  
主はそれらを世々限りなく立て  
越ええない掟を与えられた

◇フランチェスコの讃歌にもとづく（「讃美歌」#75）

1)  
ものみな こぞりて  
みかみを たたえよ  
ハレルヤ、ハレルヤ  
光のもとなる 日を造りましし  
みかみを たたえよ  
ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ

2)  
月かげ さやかに  
み空に かがやく  
ハレルヤ、ハレルヤ  
きらめく 星をも  
静かに みちびく  
みかみを たたえよ  
ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ

3)  
小川の ながれは  
ほめごと ささやく  
ハレルヤ、ハレルヤ  
実りも 豊けき  
大地を 与えし  
みかみを たたえよ  
ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ

4)  
世の悩みも 死も いかで 恐るべき  
ハレルヤ、ハレルヤ  
たがいに 助くる  
心を 賜いし  
みかみを たたえよ  
ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ

旋律：Easter Alleluia (Lasst uns erfreuen, Köln 1623)

同曲：「讃美歌 21」#223。

参考：Evangelisches Gesangbuch #515 に、口承旋律による異曲“Laudato si, o mi signore”として。

夢からさめた私は、この歌が、バッハの《マタイ受難曲》第1部の終り（第29曲）に、児童と女声合唱によって歌われるゼーバルト・ハイデンのコラール〈人よ なが罪に泣け〉（コラール・ハンドブック#111。旋律は“Es sind doch selig alle, die” M.Greiter, Straßburg 1526）の歌い出しの旋律と同じであることに、すぐ気がつきました。なんと、それまでの長い長い間、この関連にはっきりと気づいたことがなかったとは—！そしてこの現時点で、私は、何人かの悩み多い友人たちに向かって、《マタイ受難曲》の中の1曲としてではなく、あきらかにアッシジのフランチェスコの讃歌として、持ちだして来たのです。

このところ、私は、連日サッカーのテレビ中継を見て、日々勝ち負けを賭して生きるアスリートたちを思い、戦国時代のドラマや歴史本に接して、覇者たちの気ままだって領民の全生活が根底からくつがえされていた遠い昔、そしてまたそれを不可解にもわが手に再現しようとする、いまの日本をはじめ世界のいくつかの国の指導者たちの暴挙を思い、意識下の奥から、フランチェスコがつき上げてきたのでしょうか。

1961年早春、私は、早朝の到着という時刻をえらんで、ウンブリアの丘に降り立ち、アッシジの修道院・大聖堂に登ってゆきました。あの時のさわやかさは、以後みるみるうちに観光化が進み、また大きな地震のダメージも蒙ったようで、どのように変わってしまったか、わかりませんが、あの頃は、敗戦後に得られたわが国の平和憲法が、このアッシジの光景のように平和な世界として地球全体に実現することを、信じて疑わなかったものです。

最近ご紹介した宮田光雄先生の新刊『われ反抗す、ゆえにわれら在り』の中の一節「一人ひとり、あたえられた持ち場に固く踏みとどまり……」（同書p.70）を心に反芻しながら、またこの一年を、みんなできっと担ってゆこうと、思いました。



■ ジョット「小鳥への説教」（連作壁画「聖フランチェスコの生涯」より。1295頃。フレスコ。アッシジ聖フランチェスコ大聖堂）



■深大寺「水神苑」にて（写真提供、筆者）

## 創立 52 周年記念懇親会に参加して

千葉 光雄（団員・バス）

今年度の合唱団創立記念懇親会は7月5日（土）午後、去年と同じ深大寺のそば料亭「水神苑」で開催されました。出席者は大村先生以下14名。テノールの大御所川戸龍夫さんも参加され、楽しく有意義な時を過ごしました。時候は梅雨の真っ最中。会席の二階から窓外に目をやると、しっとり濡れた豊かな緑の木々を背景に、小糠雨が音もなく白い模様のように降りしきり、しばし見とれてしまいました。

会では、小海先生の乾杯の発声後、大村先生から合唱団の創立の動機から今まで50年にわたる日本語演奏の成功度、そしてこの間の四大作品連続演奏の評価をお話いただき、さらにその後の団員の減少などによる現在の困難な運営状況と、昨今の右傾化した政治状況にも関わらず、宮田先生の最近の著作からの文章（「持ち場に固く踏みとどまり……」）を引用され、合唱団が今後も創意を実現させながら、希望の道に踏みとどまるよう熱い調子で語っていただきました。

その後、歓談しながら、ようやく山を越えた四大作品連続演奏の感想等を一人一人からうかがった後、加藤剛男さんが創立当時から今までの歩みを大きく5点に要約されて話されましたが、その根幹には大村先生の一貫したぶれぬ姿勢があるということを強調されました。加藤さんは月報を現在最初からずっと読み直しされて、第一に月報の中からの引用で、佐々木まり子先生の「母語で歌う開放感と自在さ」や春秋社の高梨公明氏の「母語演奏、コラールに思うこと」の記事から、日本語訳詞の演奏の意味の大きさを挙げられました。その他では、月報の欠号のない継続的な発行、5回のヨーロッパ演奏旅行、膨大な演奏経歴（教会カンタータ125曲、世俗カンタータ3曲、モテット全6曲、ミサ曲3曲、マニフィカト、受難曲3曲、クリスマス・オラトリオ前半18回、後半16回、復活祭及び昇天祭オラトリオ、宗教歌曲集18曲など）、『バッハ・コラー

ルハンドブック』の刊行を挙げ、今までの合唱団の歩みを簡潔にそして印象深くまとめてくださいました。

楽しい時を過ごし、皆さん陽気になったいい笑顔で、水神苑の玄関で記念撮影をして散会しました。来年度はさらに大勢の方々の東京バッハ合唱団創立記念懇親会への参加を期待しております。

## オルガンとわたし

山本 弘史（団員・バス、休団中）

2013年12月に、私はバッハの《クラヴィーア練習曲集 第3巻》の全曲を山形市で演奏しました。アマチュアの教会オルガニストとしては、技術と解釈にかなりの困難を要求されるものですが、なんとか弾ききることができました。そのCDを、大村恵美子先生や、何人かの団員の方にお送りしましたところ、大村先生からは、達筆長文のお手紙をいただきました。そして、過分なお言葉をいただきました。「素晴らしいCDを御寄贈いただきまして、ありがとうございます。さすがに、ご幼少の頃からうちこまれた道だけあって、音楽がぴったりと体調によりそって流れており、硬さがないのはおみごとです。それでこそ演奏というものだと、つねひごろ私が東京バッハ合唱団の全活動に求めているものとの共感をおぼえ、うれしく存じます。」先生のお優しさがにじみ出てくるありがたいお言葉でした。この先生のお言葉を励みに、今後もオルガンとともに歩んでいきたいと思っております。

先生は、1985年に『J.S. バッハ オルガン作品全集』（全28巻、中央出版社発行）というカセットテープの全集の解説を書かれております。その1部を今回御恵贈いただきました。その全集は、スイスやイタリアのオルガンを用い、奏者もスイスやイタリア人というまことに貴重なものです。その解説は素晴らしく、先生はオルガニスト以上にバッハのオルガン音楽に精通していらしたことがわかります。楽曲構造の解説等、とても勉強になります。東京バッハ合唱団が、このような博識な先生に導かれていることが、演奏の深みを増しているのは間違いありません。知識の豊かさが背景にありますから、その解釈の方向がさし示されているのだと思います。お貸しいただいたテープによるオルガンの音は、最高に素晴らしく明晰なオルガンの音と解釈が堪能できます。

わたしが、今オルガンを弾いているのは、多くの先生方の忍耐と熱意のお蔭です。東中野教会音楽学校の福田花子先生、ピアノの串戸悦子先生、河野和雄先生、岳藤豪希先生、ジグモンド・サットマリー先生などです。幼稚園時代、良い生徒ではなく、小学校時代、讚美歌は常に1曲だけ「ささやかなるしづくすら」（「讚美歌」#463）しか弾けなかったのですが、中学から讚

美歌が弾けるようになり、30歳くらいから、パイプオルガン演奏会を開きました。そして、50歳以降により技術の向上がありました。わたしは、もっと教会オルガニストが育ってくれることを願っております。オルガンは素晴らしいのです。バッハの母国語とも言えます。バッハ合唱団の一員として歌わせていただいたことは、バッハを日本語で歌うように理解して、身近なものとしてオルガンの語法も理解することにつながるのではと思います。

最後に、この《クラヴィーア練習曲集 第3巻》について述べます。バッハは、テーマを持って、オルガン曲を書くことが多かったのですが、この曲はまさに、オルガンで礼拝を行うというテーマを持っています。まず神が入場し、ミサを行い、十戒、主の祈り、洗礼、悔い改め、聖体拝領、そして三位一体のフーガで閉じられるという、音楽で聖書のことばと、神そのものを表現した、たぐいまれな作品です。音楽が、聖書の表現、神の表現となっています。ぜひお聞きください。欠けの多い演奏ですが、わたしの演奏でよろしければコピーを作ってお送りいたします。下記アドレスまでご連絡ください：bach-schutz-hiroshi-vh@docomo.ne.jp

東京バッハ合唱団の活動が、さらなる充実期を迎えますようにお祈りいたします。

(内科医、山形県東金市在住)

## 第111回定期演奏会

### ～3.11 被災地に贈る、バッハのクリスマス音楽の花束～

[日時] 2014年12月13日(土)、19:00開演  
(開場18:30、終了21:00頃)

[会場] 府中の森芸術劇場 ウィーンホール

[交通] 京王線「東府中」駅北口、徒歩7分

[曲目] J.S. バッハ (日本語演奏)

- ・《マニフィカト》4つの挿入曲
- ・カンタータ第97番《わがすべてのわざ 主に導かる》
- ・カンタータ第62番《いざ来たりませ 世の救い主》
- ・カンタータ第36番《喜びのぼれ いと高き星に》

[演奏]

光野孝子(ソプラノ)、佐々木まり子(アルト)

鳥海 寮(テノール)、山本悠尋(バス)

草間美也子(オルガン)、東京カンタータ室内管弦楽団

大村恵美子(指揮/訳詞)、東京バッハ合唱団

[チケット]

全席自由席 3500円(当日4000円)

取扱い: 合唱団事務局(チケット発売中)

## 参加団員募集

9月から、全曲の本格的な練習が始まります。

この機会に、あなたも日本語でバッハを歌ってみませんか。事務局までお問い合わせください。

## バッハ・カンタータと教会暦の聖句一覧 ⑭

<b>BWV 149</b> 《喜びの勝ち歌は 幕屋に満てり》(1729.9.29 か) Man singet mit Freuden vom Sieg <b>【教会暦】</b> ミカエルの祝日(9.29 固定)(他に=BWV 19, 50, 130) [(書簡)]黙示録12:7-12。BWV 19に同じ。 [福音書]マタイ18:1-11。(同上)
<b>BWV 150</b> 《なれを 主よ われは仰ぐ》(1708-09) Nach dir, Herr, verlangst mich <b>【教会暦・用途】</b> 不明。 (第2、4、6曲:詩編25:1-2, 5, 15)
<b>BWV 151</b> 《いとしきわがイエス 来ませり》(1725/26.12.27) Süßer Trost, mein Jesus kömmt <b>【教会暦】</b> 降誕節第3 祝日(=BWV 64, 133, 248-III) [書簡]ヘブライ1:1-14。BWV 64に同じ。 [福音書]ヨハネ1:1-14。(同上)
<b>BWV 152</b> 《まことの道を歩め》(1714.12.30) Tritt auf die Glaubensbahn <b>【教会暦】</b> 降誕節後日曜日(=BWV 28, 122) [書簡]ガラテヤ4:1-7。BWV 28に同じ。 [福音書]ルカ2:33-40。(同上)
<b>BWV 153</b> 《主よ 見たまえ わが敵(あだ)は》(1724.1.2) Schau, lieber Gott, wie meine Feind <b>【教会暦】</b> 新年後日曜日(=BWV 58) [書簡]第1ペトロ1:12-19。BWV 52に同じ。 [福音書]マタイ2:13-23。(同上)
<b>BWV 154</b> 《イエス君は 失せぬと》(1724.1.9) Mein liebster Jesus ist verloren <b>【教会暦】</b> 顕現節後第1日曜日(BWV 32, 124) [書簡]ローマ12:1-6。BWV 32に同じ。 [福音書]ルカ2:41-52。(同上)
<b>BWV 155</b> 《主よ いつまでか この苦しみ》(1716.1.19) Mein Gott, wie lang, ach lange? (再演 1724.1.16) <b>【教会暦】</b> 顕現節後第2日曜日(=BWV 3, 13) [書簡]ローマ12:6-16。BWV 3に同じ。 [福音書]ヨハネ2:1-11。(同上)
<b>BWV 156</b> 《墓に 片足入れ》(おそらく1729.1.23) Ich steh mit einem Fuß im Grabe <b>【教会暦】</b> 顕現節後第3日曜日(=BWV 72, 73, 111) [書簡]ローマ12:17-21。BWV 72に同じ。 [福音書]マタイ8:1-13。(同上)
<b>BWV 157</b> 《主を離さず 祝福受けずば》(1727.2.6 追悼式?) Ich lasse dich nicht, du segnest mich denn <b>【教会暦】</b> マリアの潔めの祝日?(=BWV 82, 83, 125, 200) [(書簡)]マラキ3:1-4。BWV 82に同じ。 [福音書]ルカ2:22-32。(同上)
<b>BWV 158</b> 《安らかにあれ おののく心》(1735 以前) Der Friede sei mit dir <b>【教会暦】</b> 復活節第3 祝日(=BWV 134, 145) [書簡]使徒言行13:26-33。BWV 134に同じ。 [福音書]ルカ24:36-47。(同上)
<b>BWV 159</b> 《いざ見よ われら往く イエルサレムに》(1729.2.27 か) Schet, wir gehn hinauf gen Jerusalem <b>【教会暦】</b> 復活節前第7日曜日(=BWV 22, 23, 127) [書簡]第1コリント13:1-13。BWV 22に同じ。 [福音書]ルカ18:31-43。(同上)
<b>BWV 160</b> <偽作>(テレマン)
<b>BWV 161</b> 《来たれ 死の時よ》(おそらく1716.9.27) Komm, du süße Todesstunde <b>【教会暦】</b> 三位一体節後第16日曜日(=BWV 8, 27, 95) [書簡]エフェソ3:13-21。BWV 8に同じ。 [福音書]ルカ7:11-17。(同上)